
ふたりだけのクリスマス

しろつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりだけのクリスマス

【EZコード】

N2434T

【作者名】

しろつき

【あらすじ】

クリスマス当日、胸の中に複雑な想いを抱える妹と兄。その二人がクリスマスの奇跡に乗せて伝え合う。ずっと大切にしてきた、ここを。

「ふたりだけのクリスマス」1

「ねえ起きてよ」

「あと少し・・・・・」

「こら、起きろっ！」

「いてっ」

体が一回転する感覚と続けて襲ってきたわき腹の痛みに、俺は眠りから無理やりに覚醒させられた。

しかし目だけは、目蓋まぶたが重くて開けられない。

まあ姿が見えなくても、こんなことをするのは誰かくらい見当は付くからいいんだが。

「なあ、みなど。休みくらいは寝かせてくれよ・・・・・・・・

ああ。

目の前で大きなため息をつく音がしたよ。

これは嫌な予感がする。

「私はお母さんに・・・・・・起こすよう頼まれただけよ！」

耳元で大きな声を叫ばれた。

「わかった、分かったもう起きた」

耳なりがして頭が痛いけど、これ以上寝ていたら今以上にひどいことをされかねない。

俺は目に力を入れ、ぱつちりと大きく見開いた。

しまがら
縞柄しまがらだ。

目の前にはそんな光景があつた。

縞柄なんてみたのはいつ以来だろうか、子供っぽいな。
なんてくだらないことを、俺は考えてしまった。

「…………妹のパンツじつと見てる暇あるなら、早く起きて
よね

「うう」

冷ややかな目で俺を見下ろしながらそつと言つて捨てるとい、妹は乱暴にドアを閉めて俺の部屋から出て行つた。

今日の始まりは、とても嫌な始まり方だ。

～ふたりだけのクリスマス～2（前書き）

続きです。

～ふたりだけのクリスマス～2

俺は眠りまなこを擦りつつも、妹の湊に言われた通り起きると一階に降りていった。

朝から家が静かだなと思えば、テーブルの上に？ 買い物にいくからお昼は冷蔵庫のを湊と昇の二人で食べてね？ なんていう紙が置いてある。

なるほど、そういうことだったのか。

お腹すいたなあ。

冷蔵庫の中に入っているお昼を想像するとお腹がくうとなつた。

「あー、やつと降りてきた」

待ち遠しかつたというようにビビングの壁に寄りかかつて、湊が待つていた。

服装を見るに出かけるらしい。

「今日は友達と約束があるの。帰り遅くなるつてお母さんに伝え

ておいてね

「クリスマスなのにか？」

俺の言葉に湊がむつと頬を膨らませたかと思つ

「クリスマスだからに決まってるでしょ。馬鹿アキラつ！」

ドアを壊れんばかりの勢いで閉め、家から出て行つた。

家のドアは、もうちよつと丁寧に閉めて欲しいものだ。

「はあ、妹のくせに可愛くない・・・・・・」

俺は椅子に深く腰を掛けると、部屋の壁に掛けてあつたカレンダ

ーに目をやる。

今日は、十一月二十四日木曜日。

じどもあれば誰だって嬉しくなつてしまつ特別な一日。

一年間のこちばん最後にあって、こちばん楽しみなクリスマス・イブだ。

まあ我が家はとこつと、違うのだが。

赤い衣装に白いひげのねじこせんがプレゼントを持って来てくれる。

そう信じていたちこそこ頃の湊は、今より素直で可愛かったな。なのにこつから小生意気になってしまったんだ。

いや、変わってしまった原因は俺に有るんだろうな。

～ふたりだけのクリスマス～ 3（前書き）

続きです

～ふたりだけのクリスマス～3

田を閉じれば、湊とふたりで遊んだ記憶がありありと浮かんだ。ふたりで楽しみにしていた、クリスマスイブ。

泣いていた。

樂しいはずなのに、田を真つ赤にさせて泣いていた？

・・・・・ だよ。

・・・・・ ちゃんが。

泣きじゃくる湊の声、精一杯に笑う自分、次の田から泣きじやなくなった俺たち なんでだろ。肝心な部分が抜けている。

?あの花、きれいだね。とつてこれないかな?

田を輝かせて笑った、ちいさい妹。

可愛いわがままを言つ、さくら色をした唇。すこし生意氣そうな田じり。

?ほら、これ取つてきたんだよ?

子供の無謀な自信で、怪我をしてとつてきたバラの花。

?ひ・・・ひぐつあ・・・お兄ちゃんがケガしてまで、欲しくなかつたよ?

そんな俺の前で泣く湊。

ああ。そうか。

思い出すと、忘れていたことが悔やまれるほどの切ない気持ち。
けれども忘れていたがゆえに昔よりも強くなつた気持ちが、胸の
奥を締め付ける。

あの日。

俺が自分勝手な行動で泣かせてしまったのか。

～ふたりだけのクリスマス～ 4（前書き）

続きです。

～ふたりだけのクリスマス～4

と、突然ガタガタッと大きな音が鳴った。

「うおっ」

机の上で携帯が、着信を知らせるランプを点滅させ震えている。あれ、俺は寝てたのか。

携帯を開き掛けた相手を確認すると電話に出る。

「えっと、みな・・・・・・」

「アキラ今どこにいるの」

「家、だけど」

変な質問だな。

俺がどこにも用がないのくらい、知ってるだろ？「桜ヶ丘の駅前にいるから。迎えに来て、お願ひ」

それだけを伝えると、一方的に俺は電話を切られてしまった。

一体、どういうことだろうか。

はあ。

良く分からぬがしじょうがない、行つてやう。

家を出てから電車に乗つて移動すること一時間あまり、湊に言われた場所の桜ヶ丘駅に着いたのは、日も沈み始めたころだった。

駅前には電飾で彩られた大きなクリスマスツリーが一本、今日という日を演出していた。

近くでは待ち合わせをしている人や、カラフルに光る光景を眺めてたりする人たちが集まっている。

居るとしたらこの中じゃないだろ？かと思い辺りを見回してみる

が、湊は見当たらない。

駅前には座るような所はないし、近くにいるはずなんだが。

～ふたりだけのクリスマス～5（前書き）

続きです。

電話の内容も良く分からなかつたし、何かあつたのか。

急激な早さで暗くなつていく街に点滅するツリーのライト、息を白く染める寒さに、俺の中の不安は大きくなるばかりだつた。

行き交う人の流れから少し離れ、あたりをぐるりと見回してみる。駅前にあるショッピングの前に休んでいる人がまばらにいたが、その中にも湊はいない。

「あつ」

やつと見つけた。

人だから出来てているクリスマスツリーからは離れた少し暗いところで、寒そうに座り込んでいる。

まったく、心配させやがつて。
そうだ。

心配させた罰として、気付かないように近づいて驚かせてやるつ。

「やつと見つけた、何やつてんだ」

湊は、びくうつと俺の声に反応するように肩を震わせた。
しかしこちらを向こうにはほんとうとはしない。

「遅い」

返事の変わりに返つてきたのは文句の連續だつた。

「・・・・・寒かつた」

「え？」

「お腹すいた。足痛いし、どつかで休みたい・・・・・・
湊がいつもの通り、滅茶苦茶な我ままを言つ。
言つ」とは生意氣だつたけれど、声が震えている。

なんとなくだが、その理由は聞こちやいけないような気がした。

「何言ってんだほら、家に帰るぞ」

湊の方を見ないよう俺は顔を横に向けたまま、ちこちこして冷たくなった手をぎゅっと握り締めて引っ張り起こした。

～ふたりだけのクリスマス～ 6（前書き）

続きです。

～ふたりだけのクリスマス～6

湊の手つてちいさいんだな、それにすべすべしてる。

手を握つてから少しづつ、俺はいろいろな発見をした。

そして今の俺たちは、周りの田にどんな風に映つているんだろう。

年はあまり離れていないから、恋人・・・・なんかに見えているんだろうか。

いろいろな考えが頭を巡る。

湊が後ろで立つたのを確認すると俺は歩き出さうとした。

が、後ろを向くとうつむいたまま、湊は動いつけない。

「家帰るまで、もたないよ」

ゆつくり、湊が俺の顔を見上げた。

いつもなら気の強そうな目を真つ赤にさせて。

あまりの衝撃で俺は息を吸い込んだり、吐くのを忘れてしまった。

こんなにも湊は脆くて、触れてしまえば壊れそうな存在だったのか。

そうじやなくて、何か言わなこと。

でも考えがまとまらなくて、自分から言つべやい」とがなかなか言えない。

「そうだな、休むならファミレス?」

「やだ」

即答かよ。

ここに近づくには、パートやシヨウップはあるけれど、休めるよ

な所はレストランを除いたりせじんせ無かつたはずなんだが。

「カラオケか」

「部屋せまいの嫌いだし、つるわー」

部屋が狭いって、お前カラオケ好きで良く行つてただろう。家に帰りたくないなんて無茶苦茶な我がまま、びつしつつていうんだよ。

「ふたりだけのクリスマス」7（前書き）

続きです。

「ふたりだけのクリスマス」7

「なら、どこがいいんだ」

「言えばそこに行くの？」

「行ってやるさ」

俺の思いつく限りの場所では、湊が嫌としか言わない。そうなると湊に行き先をまかせる以外、手はないだろ？。

「ふふ。言つたね」

「何だ？」

何か湊がつぶやいた気がしたのだが、あまり聞き取れなかつた。

「・・・・・ あそこがいい」

「あっちは店はないだろ？」

「横になりたいから、ホテルがいい。あるでしょ？」

頭に大きな衝撃がきた。また息が止まりかけた。

どこでも良いようなことは言つたが、場所的にまずい。別に、変なことなんて少しも考えてないんだが。

「本当にか」

「本当だよ」

冷たい夜風が吹いて、湊の肩まで伸びた髪をかるく揺らす。顔の距離がすごく近かつた。

結局、俺が折れて、湊の希望通りにした。

建物の前まで来て、部屋に入るまでが一番緊張する時間だったがひたすらに無表情にしてやり過ごすことが出来た。

湊は部屋へ入るなり相當に疲れていたのか、バッグを適当に投げ

てふらふらとベッドに倒れこんだ。

それを見て、俺はとりあえず飲み物があつたほうが良いかと思い、

冷蔵庫の中から水を持ってきた。

「靴くらいちやんと脱げよな」

聞こえていないのか、それとも無視をしているだけなのか、湊は
答えない。

～ふたりだけのクリスマス～ 8（前書き）

続きです。

「んうっ・・・・・・・・」

「じゅりと湊がベッドの上を転がつた。

上から見ると、湊のスカートは捲り上げられ下着が見えている。見たことの無い姿で衝撃的だった。

薄っぺらに耳や細い首筋、弱々しく放り出された白い手足は、視線を釘付けにするには十分すぎる。

「うわあ

直してくれないか。田のやり場にすまへ困る。

「最悪」

ベッドの上から呆れるような田で見られた。

「や、違うんだ。別に何も・・・・・・」

「無理して外になんて出なきゃ良かった

湊は珍しく、消えそうな細い声を出すとゆっくりベッドから起き

上がる。

やや疲れたような顔をしていた。

「街の中は恋人ばかりで幸せそりで、寂しくなっちゃった」

無理して笑つて、このよつた顔は、見てるだけで胸を締め付けてきた。

「だけどね、アキラに無理なお願いして来てもうつて、アキラの顔を見たらすじく安心したの」

そのまま湊は言葉を続ける。

「ねえ、これ覚えてる?」

そう言つて湊がポケットから取り出したのは、色あせてしまい茶色く変色したバラの花のしおつ。

不恰好すぎるされは、俺の中には古い記憶を呼び起します。

「昔に取ったバラの花、だ。それで俺はみなとを泣かせた」

「そうだね」

「笑つてほしかったのに」

「知つてたよ。でも危ないことをして欲しくなかつたから、わたし

は距離を置いた」

言葉が、見つからなかつた。

耳は湊の声以外を聞きこじしないつえ、目は湊の顔を見たまま

動かせない。

～ふたりだけのクリスマス～9（前書き）

続きです。

～ふたりだけのクリスマス～9

「だけど、やつぱりわたし我慢できなこよ。アキラの」と今でも好き

床から俺の顔へと視線が移ってきた。

湊は田のはじに、大きな涙を浮かべてこる。

立ち上がり、一歩だけ、俺に近づいた。

手を伸ばせば腕の中に納まる距離で、見上げるよう。

「兄妹だけ……俺だつて湊のことをそう思つてる」

何度も喉まで出掛かつては詰まつていた言葉が、やつと呟えた。急に顔が熱くなつた気がした。

「じやなきや、無茶苦茶なお前の我がまま聞いていらっしゃるか

「お兄ちゃん……」

「その呼び方、久しづつで照れるな

もうずっと、湊にお兄ちゃんなんて呼ばれたことが無かつたな。だからなのか、今更そう言わるとすごく恥ずかしい。

「お兄ちゃんつて呼ぶのだめ？」

眉をさげ、湊は困りながらする顔をする。

「いこ・・・・・ナビ」

唇が、すこいく近くにあるのに気がついて俺はつぶたえてしまつた。わざと狙つているんじゃないだろうか。

「じやあお兄ちゃん。」うつ呼ぶとイケナイ関係みたいでいいね

いつもなら田じりのきつい田も、今はすくへかわいい。

「みたい・・・じやないけどな

細い湊の指が、すつと俺の手に伸びてきた。

俺は早く触れたいのを我慢して、恐る恐る湊の指に触った。
だって、俺の手が震えてるなんて分かつたら恥ずかしいだろ？。

～ふたりだけのクリスマス～10（前書き）

続きです。

冷たい指が俺の指をゆっくり開き、そっと絡めてくる。

空いたもう一方の手にも、湊は手を重ねてきた。

湊がそうすると、俺は同じく手を重ねて握り返した。

ここまで来たら、恥ずかしいコトなんてない気がした。

「わたしこれ好きかも」

俺は胸がどきどきしてこのビビッドなままでも、手の繋がりから伝わってしまいそうだった。

「ねえ、好きだつて」とひかると教えて?」

「ああ・・・・・・」

湊は頬を赤らめ、睫毛を伏せる。

湊の手、大きな目、やわらかそうな唇。

俺はただ、湊の唇へ吸い込まれるようひたすら、やっと重ねる。

兄妹とか現実とかそういうつたものは、甘いこの空気の前に意味は無かつた。

「お兄ちゃん、すいこ顔してる」

「お前だつてだらう」

「ばれた」

「ばれるつて」

こんなにも、いろいろが溶け合っている時間は初めてだった。
妹の湊が今までにないほどおしゃべり。

～ふたりだけのクリスマス～ 1-1 (終) (前書き)

続きを読む。

「泊まつて……みたい?」

「そうしてみるか

「やつた」

母さんは、そうだな。

友達の家に泊まつたと言つておひつか。

いや、いまは考えるのをやめよ! ひつ

田覚めたあの時間なんていらない、夢のよつなこの時間にまつりた

と漫つてみたいのだから。

「もう少し、じつしてこいこい?」

湊は手を繋げたまま、頭をそつと俺の胸にあずける。

湊の髪はシャンプーの匂いがして、上下する胸の呼吸が伝わつてきた。

あつたかい。

少しだけ、俺は湊の髪に顔をうずめてみた。
湊も甘えてきた。

このまま夜が終わるまで、ふたりだけのクリスマスが終わるまで、ギリギリまでずっと甘くあたたかい気持ちが続けばいいな。

何よりも強く純粋に、俺はクリスマスの奇跡にそう願つた。

翌朝、湊は昨日のことが嘘みたいにつんとした態度を取つていた。
昨日から変わったことといえば、ほんのちょっとぴりだけど、角が取れたくらい。

あとは、 そう。

人前でなければ俺は湊のお兄ちゃんでありながら、
大好きな人になれたことだろうか。

～ふたりだけのクリスマス～ 1-1 (終) (後書き)

これでこの物語は終わりとなります。
機会がありましたら、また次のお話であいましょう。
それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2434t/>

ふたりだけのクリスマス

2011年8月11日21時50分発行